慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	勝本鼎一訳 経済法則の論理的性質
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.10 (1923. 12) ,p.1836(226)- 1838(228)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231214-0226

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

勝本鼎一譯『經濟法則の論理的性質』

菊判本文三四六頁
定價二圓三十錢
岩波書店發行

本書は經濟哲學界の權威者左右田博士の原著たるとは既に讀者の承知せらるゝ所であらう。而して博士滯獨中の收穫の一であり、Carl Johannes Fuchs に依りて Tübinger Staatswissenschaftliche Abhandlungen 17 Heft に收められたものである。緒論、結論の外に結構を分つて四章となし、第一章自然法則に就いて、第二章「歴史法則」に就いて、第三章國民經濟學的概念の論理的アプリオリとしての貨幣概念、第四「經濟法則」と題する。

約言すれば、本書は『經濟學の中心を形成するものと稱すべき經濟法則に對する從來通行の解釋の難點を指摘し其眞義を闡明する事に由つて所謂科學批判を經濟學に施せるもの』（譯者序三頁）である。更に聊か詳言すれば、凡ての方法論的、論理的問題即一般的に言つて經濟學の哲學的問題の中心たるべき經濟法則の論理的性質と云ふ問題に就いて解決を與へんが爲に著者は次の三の設問を爲した。

一、吾等が或人間生活の分岐を文化問題として解釋し且之が爲に此分岐を一定の文化概念に係はらしめんと欲する之が根據以外に、歴史的個別化的概念構成は吾等の認識其のもの、構造に於いて亦立證せらるゝ能はざるや否や、又之に對して普遍化的概念構成と相並んでせしむる論理的强制力あらざるや否や。

二、經濟學は如上の意味に於て歴史科學なりや將た自然科學なりや。若くは經濟學は或知識の集合に對する唯だの集合名詞を意味するものにして、之が成素は卽兩種の概念構成にして其內に何等統一的認識目的を具有し得ざるものなりや否や。最後に

三、經濟學にして方法論的に言つて「自然科學」として存在すべきなりとせば、今日まで樹立せられたる諸法則若くは諸理論其他名稱の如何に拘らず、此等は事實因果法則の意味に於ける「法則」たり得るや否や。然るに經濟學一般若くは經濟學の一部が自然科學に非ずして、方法論的に言つて、一個の歴史科學たるべきなりとすれば斯の如き科學に於ける經濟法則一般は果して立證せられ得るや否や、又此經濟法則は、若し可能なりとすれば如何なる論理的本質を示すべきか。他方余は一般方法論的解明より特に經濟法則の主題に到達し得ん爲に、此第三問に對する解答に先立つて特に經濟學的概念構成に關する一般的考察を施さねばならない。茲に、抑々「經濟的」とは何ぞと云ふ問題が一經驗的存在科學たる經濟學の內部に於て究明せられねばならない。而して是當面の疑問を解決する直接前提たるものにして、一に之に依つて法則が經濟法則と稱せられ得るに至るべきである（原著序文十七—九頁）。

之等の三つ或は四つの疑問に答へんと力めたのが即本書なのである。而して著者は果して滿足なる解決を與へたるや否やを一に世の批判に任かすと述べて居るけれども、斯學に對する知識の極めて貧弱なる筆者の如きのよく爲し得る所でないから敢て姑く之を述べない。而も本書が學界に意味深き波紋を生ぜしめ、經濟哲學の誕生に對して爲したる貢獻に至つては、筆者と雖譯者と共に固く信じて疑はざる者である。既に原著編纂者たるフックスも述べてゐる『凡そ讀者の此の如き叢書編纂者より期待し得べきことは、本叢書の收むる所是悉く何等かの意味に於て科學的に價値ある勞作なる一點あるのみ』と。又曰く『本書の如き勞作が獨乙專門家に對して喚起し得べしと思惟せらるゝ主たる興味は即近時再び勃興せる斯學方法論の問題が、全然思潮を異にする異國の學究の頭腦に如何に反響せるかてふ事實を是より看取するを得る點に在つて存す。吾人は假令著者の見解に對して服し

難きものありとする場合に於ても尙ほ本書の與ふる刺戟と其敎ふる所の少からざるべきは確信して疑はざる所なり』と。若し夫れ原著者が本書を博士が幼少の折に始めて用ひ其後藏せられた古き小さき袴に犧し、今更此小さき袴を展覽會に出す氣にはなれないと述べて居られるに至つては、寧ろ著者の謙讓の言と認むべきである。

最後に、譯文は極めて明快であつて原著の意を盡して遺憾なきことを、附言しなければならぬ。而も原著者が本譯書をしてアップッーデートのものたらしめんが爲に隨所に附せられた補註と譯者が特に卷末に加へられた索引とは讀者と共に筆者も之等原著者並に譯者に感謝の意を表しなければならぬ。

今や經濟哲學が經濟學徒並に一般文化科學の學徒に依つて一の重要なる問題とせらるゝ秋に當つて本譯書を得たことは斯學研究者の至幸と云はなければならない。（金原賢之助）

雜報

理財學會々報

十一月八日午後二時半より大ホールに於て理財學會秋季講演會開催、興味ある時事問題に就きて堀江、小泉兩敎授の講演あり、聽講者五百を算す

變災と動亂　小泉信三氏

社會革命は資本主義發達の最高度に達したるところに起らずして、叛亂鎭定機關の混亂せるところに起りて他の波及すとのラデエクの說を紹介し、此說を奉ずるものは震災に際して動亂を企てたりとするも異しむに足らざることを言ひ、若し斯くして動亂起らば、一地方と全國との對抗を見るに至るべしとて、巴里コンミユンの前例を說き、結局ブルジョワジイは武力革命よりも合法運動を恐るとのエンゲルスの言を引き我が邦社會主義者の態度を批判し、選擧運動を遠慮すべきの理由なきことを論ず。

震災に關する種々の感想　堀江　歸一氏

彼の流言蜚語に對する我國民の態度は國民敎養の欠陷を明かに暴露せるものなりとし、火災保險問題に關しては被保險者が契約規定の明文を全然無視せる要求を爲せるものなりとし邦人に契約神聖の觀念尠きを慨歎す。次に政府の應急對策は資本家階級の保護にのみ偏せるの嫌ひなきやを論じ外債問題に就いては同情と經濟關係とを混同視するの愚を戒しめ寧ろ內債募集の得策ある所以を謂ふ。更に諸經費節減、商業振興並びに失業者救濟の急務なるを指摘す。

午後五時閉會、堀江敎授を中心として萬來舍に茶話會を開き、卓を圍んで歡談々笑、午後七時散會す。

出席幹事次の如し

本三　一柳　樫森　山田　平野

本二　日比野　渡邊　夏目　永田　江越　駒崎

本一　鈴木　和田　濱谷　松本　檜原　後藤